様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２４１９

研究課題名（和文）19世紀のドイツにおける女権運動と自然科学研究の発展，およびそれらの連関について

研究課題名（英文）The development of women's rights movement and natural sciences in Germany in the 19th century

研究代表者
竹内　拓史（Takeuchi, Takushi）

明治大学・経営学部・専任准教授

研究者番号：００４３１４７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では19世紀のドイツにおける女権運動と自然科学の発展の連関の一端を，ビューヒナー家の父，息子，娘各々の自然観や革命観，政治観，権利運動等を比較し明らかにした。
　特にルイーゼの女権運動の特徴を，兄ゲオルク同様社会を現実的・分析的に見る自然科学的視点と，父エルンスト的処世術とに見出し，彼女こそが自然科学と自由主義思想を権利運動の場で融合させ，その運動を現実的・戦略的な形で推進できたビューヒナー家唯一の人物だったことを明らかにした意義は大きい。ルイーゼ研究はヨーロッパでも緒についたばかりだが，彼女の成功は19世紀ドイツでは希有な事で，今後ドイツの女権運動を論じる際は彼女の影響は無視できない。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ゲオルク・ビューヒナー研究はドイツではこれまで盛んに行なわれてきたが，その家族についてはそうとは言えない。本研究でこれまでほとんど言及すらされてこなかった父エルンストによる鑑定書の内容について論じ，それをゲオルクのみならず，これもまたこれまであまり言及されてこなかった妹ルイーゼの女権運動とも関連づけて検討したことは一定の意義が認められるだろう。
　またその際に，ドイツ最初期の女権運動のひとつであるルイーゼの権利運動を自然科学との関連から考察したことは，今後ドイツの女権運動を歴史的にどのように位置づけるかを考える際のひとつの手がかりとなるだろう。

研究成果の概要（英文）：In this study, one of the links between the development of the women's rights movement and natural sciences in Germany in the 19th century is clarified by comparing the views of nature, the revolution, the politics, the rights movements of the Buechner family's father, son and daughter.
It is particularly significant that this study found the characteristics of the women's rights movement of Luise in a natural science perspective that looks at society realistically and analytically like her brother Georg and in her realistic strategy like her father Ernst, and revealed she was the only one of the Buechners who was able to fuse natural science and liberal thought in the right movement and to promote that movement in a realistic and strategic way.
Although studies about Luise have just begun in Europe, her success is rare in 19th century Germany, and her influence can't be ignored when discussing the German women's rights movement.

研究分野：近現代のドイツ語圏文学

キーワード：ゲオルク・ビューヒナー　エルンスト・ビューヒナー　ルイーゼ・ビューヒナー　女権運動　自然科学

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

オランダで始まった女権運動に影響を受け，フランスでもフランス革命後に女権運動が盛んになった。代表的人物はオランプ・ド・グージュで，彼女は『女性および女性市民の権利宣言』を発表する一方，ロベスピエールを公然と批判しダントンを賞賛するなど革命運動にも深く関わった。また，フランス革命の基本原則を記した「人間と市民の権利の宣言」の「人間」に「女性」が含まれていないということがグージュらの抗議運動の始まりであったことからも，フランス革命の市民権利を求める運動が女権運動に結びついていったことが理解される。

一方で，フランス革命後実権を握ったジャコバン派は，アンシャンレジームを徹底的に破壊する過程で，その「科学」までをも壊そうとした。大学やアカデミーの解体がこれに当たるが，その後ジャコバン派の指導者ロベスピエールが処刑されると，科学の分野でも新しい体制が作られる。しかしこの後ろ盾はナポレオンであり，彼の没落と共にこの体制は衰退する。だがこの体制はドイツに輸入され、フンボルトによって設立されたベルリン大学をはじめ、フランスで盛んだった「実用の科学」に加え「学問の科学」を唱えた。

このように女権運動と自然科学研究を結ぶキーのひとつはフランス革命であるが，ドイツにおいてそれら三点を結ぶ人物として本研究で取り上げるのがゲオルク・ビューヒナー（1813-1837）とその家族である。ドイツ語圏最高の文学賞にその名が冠されていることからも分かるようにビューヒナーは現在は作家として認識されているが，本職は解剖学の専門家であり革命家でもあった。ビューヒナーの自然科学論文は二本しかないため，彼の文学作品と医学・自然科学研究との内的関係に具体的に言及することには問題があるという主張（Kubik, Sabine: Krankheit und Medizin im literarischen Werk Georg Büchners. 1991, P6.）や，彼の自然科学研究は単に「詩作と政治活動の添え物」でしかないという主張（Mette, Alexander: Medizin und Morphologie in Büchners Schaffen. In: Sinn und Form, Beiträge zur Literatur. 15. Jahr, 5. Heft. 1963, P755.）もあるが、研究代表者はこれまでの研究で，ビューヒナーの文学作品と自然科学研究にはダーウィニズムの先取りとも言える思想が見られるのみならず，「人間の認識能力を超えた語り得ぬなにか」を媒介として関連があることを明らかにし（竹内拓史『宿命の文学，宿命としての自然―ゲオルク・ビューヒナーの自然科学研究と文学―』2010 年），ビューヒナー文学における自然科学研究の重要性を確認してきた。本研究では更に，これまでほとんど言及されてこなかったビューヒナーの家族についても考察し，19 世紀のドイツにおける自然科学研究と女権運動の関連を明らかにすることを目指した。

たとえば医者であったゲオルク・ビューヒナーの父エルンストは，ヘッセン大公国に仕える身ながら，ナポレオンの崇拝者だった。ここには占領国フランスに政治的，文化的崇拝の念を抱くというドイツ特有の複雑な意識が見える（ナポレオンにより方伯領が国に格上げされたというヘッセン独自の事情も関係しているだろう）。また彼は医者として精神病患者らの診察をし，詳細な記録を残している。このような政治観や医学研究は当然息子のゲオルクに影響を与えたと考えられるが，エルンストの著作はドイツでも 2013 年 10 月に出版されたばかりで，まだ全く研究が進んでいない。だが研究代表者の見るところ，ゲオルクは父の革命観や自然科学観を単純に受けついではいない。彼はフランスに留学し，最新の自然科学と革命の知見を得たが，ウィーン体制後のヨーロッパを見て，フランス革命にも，革命運動が進まないドイツにも大きな失望を感じていた。ここにも革命も科学も後進国であった 19 世紀のドイツ特有の事情が看取される。本研究課題では，これらのゲオルクとその父の革命観や自然科学研究を比較することで，18 世紀初頭のドイツにおける自然科学と権利運動の発展及び連関について考察を進めることを目指した。

またゲオルクの妹ルイーゼは作家であると同時に女性の権利運動をドイツで始めた最初期の一人であり，生理学的唯物論の『力と質量』を著した弟（三男）のルートヴィヒはドイツにおける自由主義思想を先導する役割を果たし，四男のアレクサンダーと共に 48 年革命に参加した。ルイーゼの著作はドイツで復刊したが，彼女についての研究が進んでいるとは言えない。特にこれまでの研究では，兄の文学や革命運動，自然科学研究との関連はほとんど言及されてこなかった。だがゲオルクの類い希な偏見のなさが医学研究に負っているとグツコーが言ったように（Georg Büchner Sämtliche Werke. Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. 2 Bde. 1992 und 1999, Bd. 2, S. 441.），彼は自然科学研究から社会を分析する目や自由と平等を求める思想を得ており，それは妹のルイーゼの女権運動や弟のルートヴィヒの唯物論，ヴィルヘルムの自由主義思想にも影響を与えていると考えられる。このようにエルンストから始まるビューヒナー家の自然科学研究や革命運動，女権運動，政治活動を比較することで，ドイツにおいて自然科学研究の発展と女性や市民の権利を求める思想がどのように互いに関連・影響しあいながら変遷・発展していったかを解明することを目指した。

## ２．研究の目的

18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけてのヨーロッパは，自然科学研究の分野で急速な発展を遂げた。その一つの結実がダーウィンの『種の科学』（1859 年）である。一方でフランス革命を契機に，例えばオランプ・ド・グージュのような女権運動家が活躍し始めたように，ヨーロッパで女権運動が盛んになるのもこの頃である。本研究では，一見あまり関連のないこれら二つの事象―自然科学研究の発展と女権運動の発展―が，ドイツ及びヨーロッパにおいてどのような関わりを持つのかを明らかにすることを目的とする。その際，自然科学研究者であり作家であり革命運動家でもあったドイツの作家ゲオルク・ビューヒナーとその家族，特に父エルンストと妹ルイーゼを中心に考察する。

## ３．研究の方法

本研究では，以下のように 18 世紀後半～19 世紀初頭の文献を中心に以下のような資料を収集・調査した。その際，歴史家や作家のテキストだけでなく，ゲオルク・ビューヒナーの家族を中心とした当時の作家や歴史家，女権運動家が利用した資料や，ヘッセン州の歴史や名家について記録された本の収集も行った。またインターネットも利用したが，特にヘッセン州の歴史や家族像について理解することに役立った。これらの資料には古書も含まれたが，これらの本から作家や運動家のテキストや思想がどのような歴史的背景から構成されているのかが明らかになり，彼らの思想をより深く正確に理解することに役立った。

本研究は研究代表者一人によって行なわれたが，海外の研究者との交流から様々なヒントやインスピレーションを受けた。特にビューヒナーハウス館長のブルナー氏からはビューヒナー家の歴史について，またルイーゼ・ビューヒナー協会所長のシュミッツ氏らからはルイーゼの女権運動の戦略性について非常に有意義な助言を受けることができた。

## ４．研究成果

本研究では，19 世紀のドイツにおける女権運動と自然科学の発展の連関の一端を，ビューヒナー家の父，息子，娘各々の自然観や革命観，政治観，権利運動等を比較し明らかにした。

特にルイーゼの女権運動の特徴を，兄ゲオルク同様社会を現実的・分析的に見る自然科学的視点と，父エルンスト的処世術とに見出し，彼女こそが自然科学と自由主義思想を権利運動の

場で融合させ，その運動を現実的・戦略的な形で推進できたビューヒナー家唯一の人物だったことを明らかにした意義は大きい。ルイーゼ研究はヨーロッパでも緒についたばかりだが，彼女の成功は 19 世紀ドイツでは希有なことで, 今後ドイツの女権運動を論じる際は彼女の影響は無視できないだろう。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 5 件）

竹内拓史「エルンスト・ビューヒナーの鑑定書，およびそれらのゲオルク・ビューヒナーへの影響について」（第 17 回日本ゲオルク・ビューヒナー協会研究発表会，於武蔵大学（東京都練馬区），2015 年 05 月 31 日）

竹内拓史「革命・鑑定・解剖―ゲオルク・ビューヒナーは父から何を学んだか―」（国際シンポジウム ～詩作における異文化との接触～ Dichterische Berührung mit anderen Kulturen, 於岩手大学（岩手県盛岡市），2015 年 07 月 25 日）

竹内拓史「父から子へ引き継がれたもの，引き継がれなかったもの―エルンスト・ビューヒナーとゲオルク・ビューヒナーの自然観」（2017 年度明治大学ドイツ文学会・研究会，於明治大学和泉キャンパス（東京都杉並区），2017 年 6 月 17 日）

竹内拓史「Hermann Kurzke 著『Georg Büchner. Geschichte eines Genies』の「Woyzeck」の章について（1）」（日本ゲオルク・ビューヒナー協会第 2 回定期研究会, 於明治大学駿河台キャンパス, 2018 年 12 月 22 日）

竹内拓史「Hermann Kurzke 著『Georg Büchner. Geschichte eines Genies』の「Woyzeck」の章について（2）」（日本ゲオルク・ビューヒナー協会第 3 回定期研究会, 於明治大学駿河台キャンパス, 2019 年 3 月 25 日）

〔図書〕（計 1 件）

川村和宏編，川村和宏，竹内拓史他著『異文化接触研究の諸相』（その内の「革命・自然科学・処世術，父から兄妹へ引き継がれたもの ―ビューヒナー兄妹の権利運動について―」を執筆, 朝日出版，2019 年 12 月出版予定）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者　無し
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者　無し
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。